

米芾『画史』考釈 (一)

——作品之部——

古・原・宏・伸

要旨

十一世紀末に成立した米芾の『画史』は、中国絵画史研究にとって必読の文献であるが、今日まで依拠するに足る訳註本はない。

執筆者は『画史』の全訳を意図していて、この論文はその作業の経過報告でもある。

この論文は『奈良大学紀要』第二十四号、『文化財学報』第十四集(一九九六年刊)に分載した同題の文章と一連をなして、『画史』読解のための手がかりとすることを目的とする。

はしがき

- | | |
|-----------|-------------|
| 1 顧愷之維摩 | 6 朱浮墓 |
| 2 吳王避暑図 | 7 鮮明隊 |
| 3 吳王斫輪図 | 8 張志和顔魯公樵青図 |
| 4 子敬書練裙図 | 9 明皇幸興慶図 |
| 5 支許王謝山水行 | 10 麟鳳図 |

はしがき

項目の含まれる条文の冒頭の一、二句を掲げて、本文を検索しやすいようにしてある。

各条文の番号は、執筆者の発表した『画史』に関する二つの論文、「画史における二三の問題」(『国華』一一七九号、一九九四)と「米芾画史考異」(『奈良大学総合研究所報』第三号、一九九五)に引用した条文の番号とは、いずれもずれが生じている。ことに第五十番以降は、二、ないし四番の割合で出入がある。これは執筆者の力不足のために、条文の段落を切りにくかったために起こった混乱である。

「画史考異」印刷後、鈴木敬先生が「どうしてもテキスト条文の番号が一致しないので、使用している本を送るから、番号を打ち直して欲しい」旨のお電話をいただいた。

私はそこまでして私の文章を読んでもくれる読者が現われるとは、夢にも思っていなかったから、私の混乱に恥じ入ると共に、言葉にならない喜びをおぼえた。ところが、その後にもまた、百三十四条から一つ

ずつ数字が繰り上がった。何とも恰好のつかない話なのだが、この三部作の数字でおそらく最終的に落ち着いたと考えている。

入矢義高先生には数多くのお尋ねをして、すべてに快く教えていただいた。また資料の所在、新しい刊行物の一々についても教えていただいた。

また浙江杭州の中国美術学院、任道斌教授には、道教関係の事項について多くを教えていただいた。

三人の先生には、心から御礼申し上げたい。

顧愷之「維摩」

1 故に平生靚る所を絞べて以て子孫に示す。

題して『画史』という。識者予のために耳目を増広せよ。（序詞）

相当な大風呂敷で始まった『画史』の序文は、意外に神妙な謙抑の語で終っている。そして続く本文では、まず「晋画」の目を設けて、颯爽と自蔵の顧愷之を登場させている。

2 顧愷之の「維摩・天女・飛仙」、余の家にあり。

よほどの思いがこめられていたのであろう、彼は再々この画に言及している。

4 吾が家の「維摩天女」、長さは二尺、『名画記』のいわゆる小身維摩なり。¹¹⁾

50 余の家の顧の「浄名天女」、長さは二尺五、『名画記』の述ぶる所の数に応ず。¹²⁾

『歴代名画記』の記述と符号する」ということは、まぎれもない真蹟だとする主張である。そのできればは、今一つ別の真蹟、「女史箴」と共にこう語られる。

3 「女史箴」横卷、劉有方家にあり。己上筆彩生動、髭髮秀潤¹³⁾だが、これ以上の感動は語られない。崇寧元年（一一〇二）の夏、彼は齋号を宝晋齋に変更した。宝晋齋由来の名品は四件、五点、王献之「十二月帖」、謝安「八月五日帖」、王羲之「王略帖」、それに顧愷之「維摩天女」、『画史』5にいう載達「観音図」である。法帖三点に対しては、米芾は讃辞を惜しまない。「筆法入神、……これ神物」、「吾書を閲すること一世、老いたり、信に天下第一帖なり」（「王略帖」跋）、「美なるかな、得て加うべからず」（「八月五日帖」）といった風に、自己の陶醉を隠さない。だが、顧愷之、戴逵については、奇妙に口を閉じている。

115 晋画は必ず保つべし、けだし晋物との数に縁り、（めぐりあわせによつて）居る所に命じて宝晋齋となす。

それほどの什宝について、彼は語ろうとしていない。より大きな不思議は、右の三点の法帖はすべて、入手の時期、経路、出処、時には価格までも明らかなのに、¹⁴⁾二点の晋画については一切語られていない。これは稀有の例外だけではなく、『画史』通常の記述の体例にも背いているのである。それに晋画の二点は、後述するように、その伝歴を

改めて語る必要のないほど、古い蔵品ではないのである。ということ
は、晋画は個人の所有からの割愛ではないことを暗示させるものだろ
う。入手の時期の唯一の記事は、

『宝晋英光集補遺』 「記顧愷之画」

芾近ごろ顧虎頭の「金粟坐石存神像」を収む。李伯時見て、囊を
傾けて易えんと欲す。

これは『画史』の次の条と相応する記事に相違ない。

50 余の家の顧の「浄名天女」、長さ二尺五、…李公麟これを見て
賞愛已まず、親しく白玉牌を琢き、鼎銘の古篆「虎頭金粟」の字
皆雲鶴を碾し、以て結縁す。(維摩の高邁な教えにあやかろうと
の願いをこめて、そのシンボル、雲鶴の文様を磨きだす)

「近ごろ」入手した顧愷之の画とは、まぎれもなく問題の「維摩」で
ある。この「近ごろ」がいつなのかはわからない。しかし、李公麟が
賞愛してやまなかったのは、彼が右臂のリウマチに悩んで、郷里の安
徽舒城に帰った、元符三年(一一〇〇)以前のことと相違ない。元符
三年は米芾自身で語っている。

65 李公麟右手を病んで(致仕す、時に元符)三年、余始めて画く。⁶⁵⁾
すなわち顧画維摩入手の時期の下限は、元符三年と知られよう。

元符三年、この年は潤州(江蘇鎮江)の甘露寺が大火に遭って、灰
燼に帰した年でもある。

72 潤州甘露寺、…元符末一旦火の焚く所となる。六朝の遺物地を
掃い、江左一も晋筆の蔵なし。…李衛公の祠、手植の檜(柏の誤

まり)、皆焚蕩す。

寺後重重、金碧參差、多景楼は山に面し海を背にす、天下の甲
観となす、五城十二楼も過ぎざるなり。

存する所はただ衛公の鉄塔、米老庵の二間のみ。

彼の書斎は類焼を免れた。自ら「天下の甲観」と呼ぶ景勝の地、甘露
寺の一隅の河沿いの木の多く茂った古い家を、友人王彦昭の仲介で蘇
仲恭の弟と、南唐後主李煜旧蔵の硯山と交換した、名高い海岳庵であ
る。⁶⁶⁾ここに火を逃れた顧愷之「維摩」があった。自らいう「浙江、
江蘇には晋筆は一点も残っていない」は、「乃公だけは別である」と
いう磐石の重みをもつ感慨に裏打ちされている。

元符三年という数字を念頭に置いて、『画史』に戻ろう。「晋画」の
次に「六朝画」の目をたてて、五点の顧愷之画はすべて仮(にせ)、
張僧繇の筆だという。第一条の顧愷之以下、一気呵成の構成である。
散漫に見えて、決してそうではないことは、以下の考察で知られよう。

6 蘇氏の「古賢像」十人、衣紋は自ら晋筆にあらず。

7 蔣長源、字は永仲、「宣王姜后免冠諫図」を収む。⁶⁷⁾

8 王戎の象、元余の家にあり、「李邕帖」と呂端問と易う、已上
皆仮顧愷之筆。余懷素帖をもって王詵、字は晋卿と易う。

9 「梁武帝翻經象」、宗室仲忽の処にあり、亦仮顧筆。

10 「天帝釈象」、蘇泌家にあり、皆張僧繇の筆なり。

このうち8は6の十図から分かれた一枚である。蘇氏とは蘇太簡の孫
之顔、古賢像とは、『宝晋英光集』八に、「晋画古賢十人、その名を失

す、人間行わるる名画なり」とある画である。蘇氏から出た画は、王誥に入り、切られた一枚を彼は入手した。

『書史』35 史陵という絹帖、六朝「古賢」一幀と王誥と易う。

とある通り、もと誰かわからなかったものを、米芾の判断で王戎と命名された。そして紹聖三年（一〇九六）、呂端問の李邕帖と交換してしまう。¹⁰

『書史』65 李邕三帖、…第三は余六朝の画古賢、韓馬、銀博山、

金華洞天石、古鼎、また忘記の数種の物をもって、（呂公孺の孫

端問と易う。

また9は、121、『画史』最長のパラグラフの末に現われる「梁武帝像」と同一で、所蔵者も宗室趙仲忽と動いていない。これは安徽の宿州にいた劉涇が入手し、河南の虢州にいた薛紹彭が米芾に知らせてきたものであって、『画史』中、というよりも米芾の生涯における観画の経験にとつての、最大の事件であった。『画史』の載せる劉涇への贈答の詩は、『書史』75、『宝晋英光集』三に繰返し収録されている。その詩から知られる梁武帝像とは、

峨々たる太平老寺の主

白紗冒首 冠蕤なし

武士は後ろに列んで大剣を肅しむ

宮女は旁らに侍して修眉を撃む

神清の眸子に寡欲を知り

齒露われ唇反らし 法として定（かな）らず飢ゆ

同じ画の記事は『画史』10にも再出する。

武帝は居士の服を作りし、脣を反らし齒を露わす、宮女四人花を撃てて後ろにあり、四武士戈剣を持す、髮神のごとし。

翻経は、經典をひもとく意、これで図柄の大概は知ることができよう。

当時米芾は江蘇の漣水軍使の任にあった。在任期間は紹聖四年（一〇九七）四月から、元符二年（一〇九九）六月までである。知らせを受け、画を実見した彼は、天下第一、顧愷之の傑作として、絶賛している。

（呉）道子これを見れば必ず再拜せん

曹（霸）盧（稜迦）何物ぞ 藩籬を望むのみ¹⁰

本當に天下に第一品たるべきに

却つて顧筆に縁つて漣漪にあり

漣水軍在任中の事件を、仮に最も遅い元符二年とすると、彼はその年の内に潤州に帰っている。そして、67810の伝顧愷之を否定し、9の「梁武帝翻経像」も亦にせの顧筆といつて、漣水軍当時の感動を自ら覆しているのである。その振幅はあまりに大きい。「梁武帝像」は10にいうように張僧繇筆とする。当然米芾の意見は劉涇に伝わり、劉涇はこの画を手放している。

『書史』11 右軍の「東方朔画贊」、…宗室趙令時に帰す。…劉涇、僧繇の画ける「梁武帝像」と易去す。

米芾のこの劇的な変動は、「梁武帝像」よりも優れた顧愷之画、「これぞ真蹟」という顧画に出会ったためとしか考えられない。

米芾を動揺させたその顧画こそ、『画史』第一行の「吾家維摩天女」に相違ない。これだけが最高の顧画の真蹟なのだという口ぶりが、右の推測を裏付けている。「余の家にあり」、その自信と余裕は、既見の顧画は皆駄目だという鑑識に、今こそ自分だけは到達したのだという喜びに支えられているのである。

この画に対する彼の誇りと思い入れは、次のやりとりにも伺える。

『書史』71 劉瓌：かつてわが家の顧愷之浄名天女を愛し、画をもつて易えんと欲す。吾答うるに、「もし子敬（王献之）帖あらば、便ち易うべし」。伯玉答えていわく、「これなお沙を披いて金を揀ぶがごとし」と（砂金を選りわけるといふもの）。

「人類始まって以来」（有蒼生来所無 『世説新語』巧藝、と評価された顧愷之には、数多くのエピソードが伝えられている。そのうち最も名高いものは、東晋孝武帝の寧康元年（三七三）ごろ、建康（南京）の瓦官寺北殿に維摩詰を描いて、その開帳に百万銭の寄進を喜捨したという故事である。当時二十七歳、『清羸示病の容、凡によって言を忘るの状』は、先行の張墨、陸探微の維摩像も遠く及ばず、後続の張僧繇も終に及ばぬ、独創的なスタイルを創始したものと伝える。

『歴代名画記』(二)

この図は貞観十三年（六三九）に裴孝源『貞観公私画史』、景雲二年（七一）頃、黄元之『維摩詰画像碑』、永貞元年（八〇五）に伝教大師「維摩碑」によって、瓦官寺所在として確認されている。

唐武宗の会昌四年（八四四）、四万余の寺院を廃し、三十六万人の僧尼を還俗せしめた、いわゆる会昌の廃仏毀釈が始まり、瓦官寺もその厄に遭った。逃れたのは二三の寺院と『名画記』は伝えている。ただし、会昌六年正月、長安左右街功德使の上奏によって、左街に八寺右街に十寺を留めたという。（『唐会要』四八）宰相李德裕（七八七—八四九）が、浙西節度使当時に創建した甘露寺のみは、「毀たれず、管内諸寺の画壁を取りて寺内に置」いた。（『同』三）顧愷之の維摩像は瓦官寺から移されて、「大殿の外西壁」にあったのを、襄州（湖北襄陽）刺史盧簡辞がはずして、家宝として匣（はこ）に入れていたが、大中七年（八五三）、宣宗が詔して献上させ、宮中に収めた。（『同』三）ここで瓦官寺維摩像は、その足どりは永遠に消えてしま

う。画壁が瓦官寺から移されたのは、後に説くように会昌五年のことと思われるが、宣宗の大内に入るまでの間に、もう一つ故事のあったことを『画史』は記録する。

187 穎州公庫の顧愷之維摩百補は、これ唐杜牧之の摹して、穎守に寄する本。齋龕に置いて携去せず、精彩人を照らす、余因ってその顧の画幅上に題して、「米芾審定、是れ杜牧之の本」と。よって「撥発司印」をもって、これに印す。

「撥発司印」、すなわち蔡河撥発司の任に米芾が赴いたのは、崇寧元年（一一〇二）である。これにより先き、仁宗の嘉祐七年（一〇六八）に『画史』に応ずる記録がある。

唐寺焼するに至って、杜紫微牧之池州(安徽貴池)の刺史たり、金陵(南京)を過ぎ、そのまさに圯れんとするを歎じて、工を募って十余本を搨写せしめ、もって好事者に遺る、その一はすなわち汝陰(安徽阜陽)の太守某人なり。敢えて携去せず、今に至るまで州廨(役所)に置く。丞相晏臨淄公(晏殊、九九一—一〇五五)頰に鎮する日(慶曆4、一〇四四)、かつて従事に語り、石に鏤んでその始末を記さしむ。嘉祐壬寅(7、一〇六二)、郡事を了領する暇日、数々取りてこれを観る。

(宋蘇頌『魏公題跋』「題維摩像」)

杜牧が瓦官寺維摩の摹本を作らせた話は広く流布して、南末『韻語陽秋』(隆興2、一一六四)には、張彦遠が郡齋に刻した石碣の墨本が広東にまで伝わっていたという。

杜牧が湖北の黄州刺史から、安徽の池州刺史に遷ったのは、会昌四年九月、湖北の睦州刺史に遷るのは、同六年九月のことである。模本を作らせたのは、この二年間に相違ないが、李徳裕が甘露寺に移す以前の瓦官寺での模写と伝える以上、事柄は会昌五年と考えられる。以下、顧愷之「維摩」の推移を整理してみる。

- 三七三(寧康1) 顧愷之瓦官寺に描く。
- 六三九(貞観13) 裴孝源『貞観公私画史』
- 七一一(景雲2) 黄元之「維摩詰画像碑」
- 八〇五(永貞1) 伝教大師「維摩碑」
- 八四四(会昌4) 天下の寺塔を毀つ。

八四五 (会昌5) 杜牧、模本を作らせる。
 八四五 (会昌5) 李徳裕、瓦官寺から甘露寺に移す。
 八五三 (大中7) 盧簡辞の私蔵を経て、宣宗の大内に入る。
 一〇九八(元符1) この頃劉涇、「梁武帝翻經像」を入手する。
 一〇九八(元符1) 八月望日、「浄名齋記」を書く。
 一〇九九(元符2) 米芾、漣水から潤州に帰る。
 一一〇〇(元符3) 甘露寺大火。
 一一〇二(崇寧1) 米芾、蔡河撥発司にあり、杜牧模本に「審定」の極め書をする。

ここで李徳裕の奏請によって、独り焼毀の難を免れた甘露寺へ移置された壁画に、もう一度戻ってみよう。『歴代名画記』三(「記兩京外州寺観画壁」)に載せる甘露寺十四件の壁画の中から、『画史』に関係あるものを次に掲げる。

- a 顧愷之 維摩詰
- b 戴逵 文殊
- c 陸探微 菩薩
- d 張僧繇 神
- e 張僧繇 菩薩 十壁
- f 張僧繇 菩薩并神
- g 吳道子 僧 二軀
- h 吳道子 鬼神

これを『画史』の記事と比較してみる。

72 潤州甘露寺、(一)張僧繇四菩薩、…又(二)陸探微神、…下に一白獅子、神彩人を驚かす、…(三)明間に二つの吳道子行脚僧あり、吾れ行脚僧を浄名齋に移置して、もって風雨を避けしむ。已上並びに会昌中の廢寺に、本道(わが地方)において毀寺に合し、この寺に移し來たる。その殿中に明皇(玄宗)の銅像を置く、よって廃せざるを得。

『画史』の(一)、(二)、(三)は『名画記』の載せるe、c、gに相当しよう。「吳道子行脚僧二」は、『名画記』の「吳道子僧二軀」であり、「陸探微神、白獅子」は、「陸探微文殊菩薩」、「張僧繇四菩薩」は、「張僧繇菩薩十壁」から出ているに相違ない。

熙寧四年(一〇七二)十一月、甘露寺に遊んだ蘇軾は、「甘露寺」詩に寺中の壁画について、

僧繇六化人 霓衣冰紈を掛け

隠見十二疊 観者夸謾を疑う

破板陸生の画 青貌戯れて盤跚

上に二天人あり 手を揮って翔鸞のごとし

と歌い、自註にも「画獅子一、菩薩二、陸探微筆」とあって、よほど陸探微の菩薩が印象に残ったものらしい。

元豊七年(一〇八四)、甘露寺を訪れた張舜民は、蘇軾に次ぎ、米芾に先立つ時期の諸壁の状況を、張僧繇の菩薩は蘇軾と同じ六体、陸探微は菩薩二、神一、師子一といい、おそらく寺内の伝称をめぐって、画家名に異同のあったことを示唆している。

甲子、陳翦とともに甘露寺に遊ぶ、…仏殿の画牖門、菩薩六軀、世に張僧繇筆と伝う。菩薩二、神一、師子一、世に陸探微筆と伝う。予の家の所蔵の天王と小しく異なる。

(宋張舜民『画墁集』七)

ともかく米芾はこの寺の「吳道子行脚僧を浄名齋に移置して、風雨を避けしめた」といつている。「風雨を避けしむ」とはよくいったもので、実際は非合法に、無断で持ち出したわけである。寺壁を持ち出すことは、会昌の廢寺では公然と行われたらしい。

会昌五年、武宗は天下の寺塔を毀ちて、兩京に各おの三画所を留む。故に名画の寺壁にあるもの、唯だ一二を在するのみ、当時好事あり、或いは掲取して(自家の)屋壁に陥す(はめこむ)。

(『歴代名画記』三)

だが、米芾の頃には会昌当時の文化財を破壊から守るという名目はすでに成立しない。「風雨を避ける」は単なる口実で、これは盗みであり、公然とは明言しにくい事態に変わっていただろう。この他の画壁について彼はもはや語っていない。

というのは吳道子行脚僧以外に、彼は「風雨を避けしめた」画壁があったに相違ない。それは「神彩人を驚かす」と彼のいう陸探微の白獅子、文殊が、いつのまにか米芾のものになっていたからである。

閔蔚宗に褚河南撫する所の、虞永興(世南)「枕臥帖」あり、…米見てこれを愛す。崇寧の間、その子長源に京口に遇う。時に蔚宗すでに下世す、米、長源に従って此の帖を求む。長源これを斬

（おし）んでいわく、「ただ公の陸探微の獅子を得ば、すなわち可なり」と。これに従う。〔米襄陽外紀〕四 嗜好

右の関杞、字は蔚宗は、熙寧四年、提举広西常平、太子中允となった人物で、その虞世南「枕臥帖」については、

『書史』47 唐虞世南「枕臥帖」、双鉤唐摹、関杞の処にあり、上に「褚氏図書」の古印あり。

と記録している法帖である。

陸探微もまた呉道子に続いて、彼の家に移されたとすれば、『画史』に出処不明のまま、顧愷之に並んで突如として現われる、戴逵の画も甘露寺から彼の家に移ったものに相違ない。

5 戴逵観音、余の家にあり

51 戴逵観音も亦余の家にあり

と繰返される戴逵の画も、かつて甘露寺大殿の外の西壁にあったと記録される、「戴安道文殊」と断定してよいのではないか。すなわち呉道子、陸探微に準じて米芾が持ち出したものと考えられる。『画史』の記述からみて、呉道子画をはずした時には、戴逵、陸探微はまだ寺内にあった。呉道子を持ち出した後に、米芾の移動は戴逵、陸探微に及んだものと思われる。

「呉道子行脚僧を浄名齋に移置した」という、その浄名齋の浄名とは、清浄無垢の名声が遠くまで伝播する意に基づく、維摩詰の別称である。『画史』50、「余の家の顧の浄名天女」という呼び方は、まさに彼の書齋を維摩と名づけることで、自らを維摩居士と擬定したものだ

ろう。当時彼にはさして実感はなかったのではないか。

この浄名齋を用いたのは、元符元年八月からで、『宝晋英光集』六、「浄名齋記」にその由来は明らかにされている。全文五百字を越える文章には、問題の顧愷之は一言も出てこない。大半が甘露、多景楼の絶佳の眺望に費され、景勝の地に老を卜した幸運が語られる。浄名齋の由来については、蔣永仲（『画史』冒頭に登場する親友）から贈られた詩の末句、

ために借る 文殊方丈の地

中間容取す 病維摩

をとって、友人仲宣（呂定か）が命名したという。「浄名齋記」は元符元年八月望日、甘露寺を離れた漣水の嘉瑞堂で書かれている。つまり浄名齋は顧愷之「維摩図」入手を記念して命名されたものではない。この時点で米芾はまだ画を持っていなかった。もしも画を所有していたのなら、どんな婉曲な表現にせよ、あるといわずにおれないのが、彼の性分だからである。齋号が友人の命名で、自分の意志によるものではないことの消極さが、右の推測を確かにさせている。しかし、後日の「維摩図」の収集は、浄名齋を名実共に成立させることになった。彼の得意や思うべしである。『書史』や『画史』の伝える、収集の一旦に激しい喜怒哀楽の情を隠さなかった米芾のだが、この喜びについては一切語るところがない。どうみても、この画の非合法性が色濃く影を落としているのである。

「維摩図」入手は、漣水当時所見の「梁武帝像」始め、伝世数点の顧

画を否定させるほどの影響力を彼にもたらした。それは潤州帰郷後の元符二年六月から、甘露寺焼失の三年某月の間である。一方では甘露寺の諸壁をはずして、この年彼はさぞ忙しかったことだろう。この間の経緯と行動については彼は沈黙のまま、崇寧元年の宝晋齋変更へと進行するのである。王献之「十二月帖」の跋を取り換えた彼はいう。

崇寧元年五月十五日、跋を易う、時に甘露の下、吾が家の宝晋齋の碧梧桐甘本

彼の前には無限ともみえる幸福の蒼い色が、眼下の海と空のように広がっていた。

蘇軾の詩によって、甘露寺大殿の陸探微画の材質が板製であることがわかっていいる。戴逵については資料がないが、旧壁画であるからにはやはり板だったろう。一方顧愷之「維摩」は、

50 余の家の顧の浄名天女は、唐の鏤牙軸、紫錦装標、李公麟これを見、賞愛してやまず、親しく白玉の牌（巻きどめの爪）を琢いて……

によって、明らかに軸装であって壁画ではない。

ただし壁画の材質が紙絹の場合、軸に改装する方法があったらしい。127 沈括存中、唐人壁画両大軸を収む。

は、その事情を示唆している。ともかく、一体この画はどこから来たのだろう。

もともと甘露寺に移置した原本は、晩唐の内府に納まって実在しな

かったはずである。これより先き杜牧は原本から十余本、「画史」では百補（鋪の訛か）の模本を作らせた。潁州公庫に置かれていると米芾のいうこの画が、実は偽物だとする意見が、芾所見の直前にある。前に引いた嘉祐七年（一〇六二）の蘇頌跋の後半に引かれている。

或る人いう、「杜本はすでに後人に竊取せられて、今存する所の者は、けだし再び臆搦を経たるなり」と。然れども気像超遠、彷彿として当時の人物を見るがごとく、すでに愛すべし。いわんや牧之の伝うる所をや。いわんや長康の真蹟の想慕するに足らざるをや。よりにて工人に命じて、その本を移写してこれを家楮に蔵し、また像の旁に題す。丹陽蘇子容記。

（宋蘇頌「題維摩像」「魏公題跋」）
真偽の噂の入り乱れる中で、重模本の生まれる事情を巧まらずに語っている。

想像をたくましくすれば際限がないが、瓦官寺、甘露寺の周辺には伝顧愷之「維摩図」が複数存在した。現には瓦官寺の「維摩図」を、米芾は見たという。当然寺伝に沿った後補の画に違いないが、ともかくあった。

164 吳中に一士大夫あり、かつて余の家の顧愷之の維摩を見、更に筆法を論せず、すなわちいう、「かくのごとき近世の画は甚だ得やすし」、侍史を顧みていわく、「明日胡常売（道具屋）をして両本を尋ねしめよ」と。後数日、果たして両凡俗本あり、即ち題して「顧愷之維摩、陸探微維摩」という。顧愷之と題する者は、

文殊なく只一身、これかつて瓦棺の象に見しものなり。

続けてすでに一旦収得し、おそらく手放してしまっていた甘露寺壁画の陸探微にもふれている。

その一に文殊睡師子あり、故に陸探微という。かつて甘露の陸探微に、張目（目をむいた）の師子ありしなり。

その中の一つを米芾は手に入れたものだろう。顧愷之か否かはわからない。「梁武帝像」よりは優ると判断した芾自身の命名である。そしてこの画が顧愷之に対する彼の古い見方を一変させ、新しい概念を作らせたのであった。

10 張（僧繇）の筆の天女、宮女は面短にして艶、顧はすなわち深靚（静）、天人の相をつくる。

張僧繇の作品の伝世が皆無である以上、米芾の見解の是非を確かめるすべはないが、

象人の美、張はその肉を得、陸（探微）はその骨を得、顧はその神を得。（『歴代名画記』五）

といった抽象的な批評の語ばかりで、具体的な記述のおよそない顧愷之の画について、右の『画史』の条文は、ほとんど唯一の指摘なのである。『画史』には時としてこのように事例があって、貴重な資料が評価されずに埋もれている。

顧愷之の画を個人から入手するなど、およそ不可能な話である。個人でなければ、あるとすれば寺院でしかない。

上に引いた虞世南「枕臥帖」を、寺僧と取り引きした関杞はこう語っ

たという。

『書史』47 関嘗て余にいて曰く、「昔越州の一寺、仏殿を修む。梁栢内に一函を蔵す、古摹帖数十本、…関、僧と善し、枕臥…三帖を購得せり」と。

顧愷之の場合は、もっと秘密にしなければならぬ事情が介在したのではないかと想像される。

けれども、杜牧の本は蘇頌が聞いた噂よりも、一層疑わしい。潁州公庫の杜牧の本を伝える『画史』の記事は、顧愷之当時の山水画の遺風を伝えているとはとても思えないからである。

187 その屏風上の山水林木は奇古、彼岸の皴は董源のごとく、すなわち人の称する江南（画）と知る。けだし、顧より以来皆一様。

隋唐及び南唐、巨然に至るまで移らず、今池州の謝氏も亦この体を作る。余隋画の「金陵図」を畢相孫に得、亦この体に同じ。

これは現代では全く通用しない。我々に比して情報の不足した米芾の限界だったと思われる。

『画史』冒頭の「晋画」「六朝画」の条文の配列はいかにも散漫で不統一に見られやすい。それは121条漣水での「梁武帝像」に始まった、米芾の顧愷之探求が、2、4の「吾家の維摩」を基準作とすることで、6、7、8、9、(121)、10の伝顧愷之画を軒並み否定して、二つの時代の章を終えている。つまりこれらの条文は彼の connoisseurship（鑑識体系）の核心の部分が形成されていた、過去の事実を率直に

示しているのである。「梁武帝像」発見の故事を、121条にまで下げたのは、宋以後の条文を画家、収集家別に分類したからである。彼にとつて重要なのは、彼の内部の顧愷之の概念が、正確か真実かなのであって、自分の到達した結論を時間の経過に従って配列し、説明を加えて他人にわかりやすくする必要などの関心は全くなかったのであった。「画史」に浴びせられる悪評の中でも最たる、無秩序、不統一は、かくして生まれるべくして、必然的に生まれたのであった。

- 1 この記事は、現行の『歴代名画記』にはないことから、副本が存在したという議論がある。島田修二郎「歴代名画記疑議」P437、『中国絵画史研究』、中央公論美術出版、一九九三
- 2 (1)に同じ。
- 3 この劉有方は、太宗時の右諫議大夫、同知樞密院事の劉昌言の長子で、真宗時の比部員外郎。『宣和画譜』十二、劉瓊の伝に収集家としての父有方が語られる。葉夢得『石林燕語』一に、錢藻旧蔵(『画史』114)の「盧鴻草堂図」の所蔵家、劉有方とあるのは、別人内官の劉有方と内官劉元方とを混同した誤りである。
- 4 王献之「十二月帖」↓元豊七年、蘇澈と古玩とを交換
謝安「八月五日帖」↓建中靖国元年二月十日、蔡京より贈与
王羲之「王略帖」↓崇寧二年三月九日、李勣から十五万錢で購入
- 5 虎頭は顧愷之の幼少時の字、金粟は維摩居士の前身の名。
- 6 原文「李公麟病右手、三年」は、「致仕時」三字の脱落があると考える。
- 7 この条、おおきな錯簡と竄入がある。古原「米芾画史考異」(『奈良大学総合研究所報』第三号、P517、一九九五)
- 8 蘇軾「甘露寺」詩、張舜民「画境集」、ともに柏という。樹齡三百年、合抱の大樹と後者はいう。
- 9 蔡條「鉄困山叢談」六。蘇仲恭、一本に仲容、蘇舜元の孫という。
- 10 蔡條「鉄困山叢談」六。大きき手指の三十六峰が聳える寶石という。
明陶宗儀「輟耕録」六に図がある。

- 11 ここに居を定めたのは、「浄名齋記」を書いた元符元年八月十五日をわずかに遡る時期である。以後崇寧元年五月の宝晋齋の称呼変更まで、自宅の総称として海岳庵が用いられた。
- 12 「宣王皇后免冠諫図」については、古原「画史考異」(一)、(『奈良大学紀要』24号、一九九六を参照)
- 13 当時王詵は、懷素絹帖一軸の雜論故事の書の二十余に分断されていたものの復元、再収集を志していたという。その一つを米芾が持っていたわけである。「書史」35にみえる。
- 14 「画史」、「宝晋英光集」とともに、曹劉に作る。劉では該当の画人がいない。曹廬は「書史」に従った。
- 15 顧愷之の生卒年、制作年時については、谷口鉄雄「顧愷之と瓦官寺」(『九州大学文学部四十年記念論文集』一九六六)、後に「東洋美術史論考」中央公論美術出版、一九七三所収、を参照。
- 16 「全唐文」二六六、宋李昉等奉勅撰『文苑英華』八五七、唐黄元之「潤州江寧臬瓦棺寺維摩画像碑」、具体的なことはほとんど知ることができない。
- 17 伝教大師「瓦官寺維摩碑」、「将来越州録」
- 18 李徳裕は会昌廢仏令の宰相で、浙西にいなかったで、この話を疑う説もある。長広敏雄「歴代名画記」1、P260、平凡社東洋文庫305、一九七七
- 19 「歴代名画記」には寿州刺史に作るが、『旧唐書』一六三にいう襄州が正しい。註15、P67
- 20 補は鋪、鋪の誤訛であろう。
- 21 蔡河撥発司については、古原「米芾画史考釈」(一)、『奈良大学紀要』24号、一九六六を参照。
- 22 蘇頌(一〇二〇—一一〇一)、字は子容、泉州(福建晉江)に生まれ、丹陽(江蘇鎮江)に寓する。慶曆二年の進士、紹聖四年、太子少師をもって致仕し、建中靖国元年五月、卒する。八十二歳。『宋史』三四〇)
- 23 宋葛立方「韻語陽秋」十四
近歳京口都聖與來為健康總領、首詢維摩不存之、因寺僧莫能答、因語之曰、某守南雄、嘗有人示石碣云、唐会昌中杜牧嘗寄瓦棺維摩摹本于陳穎、

張彦遠刻于郡齋、其因求陳穎之本、又刻于南雄、尚有墨本在篋笥
24 譚黎宗纂編『杜牧研究資料彙編』P 159—P 163、芸文印書館、一九七二

吳王避暑圖

86 古人図画無非勸戒、…吳王避暑圖、重樓平閣、動人侈心

吳は江蘇吳県を中心に建国された国で、春秋、三国、隋末、唐末の四度ある。その中でエピソードの知名度からみて、『画史』の吳王は、前六世紀、春秋五霸の一人で、越王勾踐に亡された、吳の最古の国王夫差であろう。『画史』160条にみえる「吳王斫輪図」の吳王については諸説がある。

吳王夫差の避暑の故事は知られていないが、「明皇避暑図」が「明皇避暑宮図」と、同義に用いられていることから、「吳王避暑図」は、具体的に吳王が涼を納れて何かをしている人物画ではなくて、吳王の栄華を顯示するための壮麗な建築画、「吳王避暑宮殿図」と考えて不可ないであろう。『画史』にいう「重樓平閣」が、見る者の眼にまざるとびこんでくるものは楼台であることで、そのことを示唆している。「避暑」と「避暑宮」とが混同されている例を示す。次の「明皇華清宮避暑図」が細密な巧芸画、界画であることを理解させる。

僧楚安、蜀州什邡人也、俗姓句氏、…有明皇幸華清宮避暑図、吳

王宴姑蘇台図、此二図皆画於牆壁図簇团扇之上、其牆壁図簇团扇大小雖殊、功夫並無減者、奇巧如此、当時公侯相重、皆称妙手

〔益州名画録〕下

「明皇避暑宮図」の伝世品に、大阪市立美術館の蔵品がある。宋太宗時、奇行の多かった界画の第一人者、郭忠恕筆と伝える。（図1）

次は郭忠恕画の技量の報告である。

郭忠恕避暑宮殿図、…論者以為古今絶芸、此軸水殿図、千楹万櫺、曲折高下、纖悉不遺、而行筆天放、設色古雅、非忠恕不能也、宣和御府所蔵三十四種、有明皇避暑宮殿図四、此豈其一耶、…正德十四年己卯七月既望、文徵明書

〔清河書画舫〕巳



1. 「明皇避暑宮図」

(1) 引用文の文徴明跋は続けて、「この図はもと釣鰲図と呼ばれたことがある。木で作った鰲(鼈に同じ、すっぽん)を釣って、酒盃を勧める興をしているものか」という。とすると人物画の要素も加わっていると考えられる。

「旧伝此為釣鰲図。…刻木為鰲魚、沈水中釣之、以行勸罰、此図有鰲之類浮水面、豈避暑時用以行酒邪、其事不可考、而此図則避暑宮無疑矣」

(文徴明跋)

また人物画家が「吳王避暑」を描いたという記事があって、これには避暑する人物画が描かれていた可能性が大きい。

「杜胄、…得周昉筆法為多、尤工蜂蝶、及曲眉豐臉之態、…吳王避暑等図伝於世」

(宣和画譜) 六、人物門

「宣和画譜」八、宮室門、郭忠恕にはほかに「避暑宮殿図」四、「山陰避暑宮図」四を載せている。

吳王斫鱸圖

160 薛紹彭道祖有花下一金盃、…又收吳王斫鱸圖、江南衣文、金冠

右衽、大榻上背擦兩手

吳王については、「吳王避暑図」を参照。米芾所見と同一と思われる「吳王斫鱸(なますを切る)図」を、董道が記録している。

それによると、宮殿の前庭で料理人が鮮魚を料理し、吳王と群臣が食べている光景という。董道はさらに考釈を加えていて、幻術を使った故事なのだという。「三國呉の道士、介象、字は元則は、吳王と鰻魚(どんな魚かは不明)について論じ、前庭に穴を掘らせ、水を運ば

せて満たし、餌を求めて釣をすると、たちまちにして鰻魚がかかった。そこで肉を刻んで、君臣が舌鼓をうった、これが吳王斫鱸(膾)なのだ」という。伝梁任昉『述異記』によると、夫差の姑蘇台は三年の工事を要した豪華な建築であったという。画面にはその華美のさまも加わっていたのだろう。

今画者之意、不涉江湖、取於殿庭、其知得魚尚矣、汲水引繯連之、得鰻魚滿前、甕人膾之、獻於王、群臣列官、以次授食、世謂吳王斫鱸図、昔介象之吳王其於国也、与王共論鰻魚、乃於殿庭作坎、汲水滴之、并求釣、象起餌、須臾得鰻魚、乃使厨人饌膾、均及從臣、即此図是也

(広川画跋) 四、「吳王斫鱸図」

吳王斫鱸には、さらに後日談が付いている。夫差が食べ残しの魚肉を河中に棄てたところ、なます形の小魚に化したので、「膾余」と名づけられたという。『搜神記』では夫差の父、闔閭に変わっている。

江東名余膾者、昔吳王闔閭江行、食膾有余、因棄中流、悉化為魚、今魚中有名吳王膾余者、長数寸、大者如筋、猶有膾形

(晋干宝『搜神記』)

膾余の魚の故事の主人公には、夫差、闔閭のほか、吳王孫權(「神仙伝」、『太平広記』四六四 水族)、越王勾踐(『事物紀原』「虫魚禽獸部」膾殘、小魚の名は膾殘、一に王余魚に変わっている)の諸説がある。次は「元祐丙寅」(元年、一〇八六)の観記、高宗の印璽があると

いう。米芾所見と同一画か否かは定かでない。顧愷之吳王斫膾図、紙画、後有元祐丙寅四字及及乾卦印、紹興小

鹽

（周密『雲煙過眼録』下 陳氏所藏）

斫鱸、生魚をなますに料理する法は、唐段成式『酉陽雜俎』七、「酒食」に

鯉は一尺、鯽（ふな）は八寸のもの。泥をはねる羽をとる。：腹の脂で刀を拭う。亦魚の脳も使う。これにより鱸の細い肉が刀に着かない。

又鱸法、鯉一尺、鯽八寸、去排泥之羽、：用腹臑拭刀、亦用魚腦皆能鱸縷不着刀

また同じ書物の四、「物革」には、斫鱸の名手の話がみえる。南孝廉のおろした肉は、縮み絹のように薄く、糸のように細く、吹けば飛ぶほど軽かったといい、斫鱸の料理とは日本の刺身とは違って、千切りにしたものらしい。その庖丁さばきは打てば響くりズミカルなもので、人を集めて見世物にしたらしい。

進士段頌、常識南孝廉者善斫鱸、穀薄糸縷、輕可吹起、操力響捷、若合節奏、因会客術技、：

また王羲之、玄宗皇帝の例がある。

徐彦和送此本云、是王右軍斫膾圖、予觀此榻上偃蹇者、定不解書蘭亭序也、（蘇軾『東坡題跋』五 右軍斫膾圖）

これによると王羲之は長椅子に寝ころんでいるらしい。『画史』の両手をすり合わせている主人公とは違うようだ。

『宣和画譜』六、杜庭睦は「明皇斫膾圖」を描いたといい、「人物

の品流を風神気骨の間によく理解した画家」と賞賛している。この画は南宋に再度現われる。内府を出て私人の所蔵に変わっている。

紹興十三年、張俊解兵柄、封清河郡王、勅建甲第、二十一年冬十月、高宗幸其第、供進御筵、：有御宝画十軸、：杜庭睦明皇斫膾

（明田汝成『西湖遊覽志余』三 偏安佚豫）

(1) 『太平広記』七六、「方士」一には、「介象は呉王と膾について、何が一番うまいかを議論した。介象は海中の鱸魚（ぼら）が最高と答えて、殿前に四角い穴を掘って、水を入れ：ぼらを手に入れ、膾にした」（引『建康実録』）という。話のデテイルは『広川画跋』より面白くなっている。

(2) 『画史』『広川画跋』のほかは、「斫鱸」は皆「斫膾」に作っている。『孟子』「尽心下」に「膾炙（あぶり肉）と羊糞（なつめ）といずれか美なる、孟子曰く、膾炙なる哉」とあるように、美味の代表とされていた。そのため鱸をめぐって、さまざまな逸話が伝えられている。劉録事は唐の大暦年間（七六六―七七九）、官を罷めて和州（安徽）の旁県にいた。一度に数人分を平げる大食漢だったが、最も鱸が好きで、まだ腹一杯食ったことがないというのが口癖だった。そこで知り合いが魚を百余り網にかけて会食をした。：劉の碗の中の魚の骨が人間になって、劉の頭をつかんで血が流れた。：（『酉陽雜俎』十五「諾臯記」下）越州（浙江会稽）の盧冉は、：山陰県の顧頭堰に行き、従兄の韓確と同居していた。小さい時から鱸が好きで、役人に頼んで魚をもらった。韓はその時寝ていたが、夢に魚になり、網にかかって、首を打たれて眼がさめた。茫然としている韓に盧がわけを尋ねると……

（『同』「支諾臯」下）

子敬書練裙図

87 余嘗与李伯時言分布次第、作子敬書練裙図

子敬は王献之（東晋建元2—太元11、三四四—三八六）の字。王羲之の第七子、父の大王に対して小王とよばれる。練裙は絹の下着。劉宋、虞翻「論書表」、「宋書」六二、各羊欣伝にみえる故事。

羊欣（太和5—元嘉19、三七〇—四四二）は、泰山南城（山東）の人、文帝の時、新安太守、黄老を好み、医術に長じ「藥方」の著がある。しかし、羊欣が今日知られているのは、「古來能書人名」の作者であり、王献之に書を学んで、隸、行、草の各体を善くしたことにあ

る。羊欣が十五、六歳（「宋書」には十二歳に作る）のとき、呉興（浙江錢塘）の太守だった王献之が呉興の烏程県の羊欣の家を訪ねた。ちょうど昼寝をしていた欣の裙と帯に王献之は字を書いた。目をさました欣は、大喜びでその裙を家宝にしたという。「太平広記」二〇七所收の引用「図書会粹」では、王献之は羊欣の能書を知っていて、彼を訪ね、新しい白絹の裙に書いたという。

「宣和画譜」七、李公麟の項に「書裙図一」とある。「画史」にいう「構図と題材を二人で相談し、李公麟が描いた」、とする彼の話に合うことになる。

支許王謝於山水間行図（山陰図）

87 余嘗与李伯時言分布次第、作子敬書練裙図、…余又嘗作支許王謝於山水間行、自挂齋室

支許王謝は、山沢の清遊を愛した東晋の風流才子、支遁、許詢、王羲之、謝安の四人、その「山水間の散策」のさまは、「山陰図」とよばれ、最古の文人の雅会、文会図の故事を描く画題の一つ、¹¹⁾ 宋以後は「蓮社図」、「蘭亭修契」、「西園雅集」などの画題が「山陰図」に代った形で、流行していない。

山陰は浙江会稽、永和九年（三五三）、王羲之が招集した蘭亭修契の雅会で名高い景勝地である。¹²⁾

会稽に佳山水あり、名士多くこれに据る、皆文義を以て世に冠たり、並に室を東土に築き、羲之と好みを同じゆうす。

（「晋書」八〇 王羲之伝）

「山陰図」に登場する四人の交誼は、

安、会稽に寓居し、王羲之及び高陽の許詢（玄度）、桑門の支遁と遊処す、出ずればすなわち漁弋山水、入りてはすなわち言詠属文、処世の意なし。 （「晋書」七九 謝安伝）

とある通りで、これが「山陰図」の成立する原型になっている。

「山陰図」の図柄については、葉夢得の所蔵品を周煒が記録している。紙本の横巻で人物は十センチメートルほどの大きさという。陝西

の池陽で周輝が見たものは、三十年前梵隆（フリアギャラー）に作品がある）が、李公麟の原図を葉夢得のために写した、「真偽ほとんど弁ぜざる」一本である。先後の序跋は皆葉夢得の書であるが、『石林文集』には収められていない。昂然と立つ許詢、腕組みをする王羲之、山道を歩くための特注の下駄をはき、瘦せた支遁をふり返る謝安など、各人の特徴を示すという。

童眠李伯時画許玄度、王逸少、謝安石、支道林四人像、作山陰図。
玄度超然万物之表、見於眉睫、逸少藏手袖間、徐行若有所觀、安石膚腴秀沢、著屐、返首与道林語、道林羸然出其後、引手出相酬酢、皆得其意、俯仰步趨之間、筆墨簡遠、妙絶一時、碧林道人梵隆、少規模伯時、為余臨写、真偽殆不弁、更三十年、世当不知有兩伯時也
（葉夢得「山陰図」序『清波雜志』十二）

以上は李公麟「山陰図」の模本をめぐる報告である。だが、別に伝えられた原本には、米芾による四人の画像の小字の題名、芾の印記⁸⁵、芾の観記と題画詩、哲宗時の戸部尚書李公枋ら四人連名の跋があった。芾の観記と跋文の日付は、ともに元豊五年（一〇八二）の正月である。跋文によると、

南唐顧闳中の山陰図を借りることができなかつたので、米芾の話を李公麟が聞き、想像してこの画を作ったという。

原本の記録を抄出しておこう。米芾ははっきり李公麟筆と認めている。

李伯時山陰図、許玄度、王逸少、謝安石、支道林四像、並題小字、是米老書、…并米字印、題南舒李伯時為襄陽米元章作、下用公麟

小印、甚奇、尾有紹興小璽、跋尾云、

米元章与伯時説許玄度、王逸少、謝安石、支道林、當時同游適於山陰、南唐顧闳中遂画為山陰図、三吳老僧宝之、莫肯伝借、伯時率然弄筆、随元章所説、想像作此、…元豊壬戌正月二十五日、何益之、李公枋、魏季通同観、李琮記

壬戌正月過山陰、伯時作迥若神明頓還旧観、襄陽米芾、山陰図

長沙作（略）伯時為元章作山陰図、神情邁往、令人顧接不暇、今

歸希文家、宣和六年十二月十八日、子楚師正同観

（周密『雲煙過眼録』上）

という。「伯時率然として筆を弄し、元章の説く所に随って、想像してこれを作る」、これは『画史』87にいう、

余かつて李伯時と分布次第をいう。

に相応する事実と相違ない。「構図や題材を李公麟と相談して決めた」という米芾の話に嘘はなかつた。しかし、（嘘の）なかつたのはここまでで、続く「余またかつて支許王謝山水の間を行くを作る、自ら齋室に挂く」以下では、作者はあべこべに芾になっている。何とも不可思議な話である。

このおかしな実態を解決するために、もう一度『画史』の原文を検討してみよう。

(一) 余かつて李伯時と分布次第をいう、「子敬書練裙図」を作る。

図成りてすなわち権要に帰し、竟に復た得られず。

(二) 余またかつて「支許王謝於山水間行」を作り、自ら齋室に挂く。

(三) また山水は古今を相師とするを以て、少しく出塵の格あり、よつて筆にまかせてこれを作る。多く煙雲掩映し、樹石は細を取らず、意似ればすなわち已む。

四 知音の求むる者には、只三尺の横挂、三尺の軸を作る。

(四) 長さは三尺を過ぎず、…更に大図を作らず、一筆も李成関同の俗気なし。⁸⁶⁾

(一)の、「子敬書練裙図」、(二)の「支許…間行」図、ともに米芾が描いたとしか読むことはできない。そして「子敬…図」は権力者に強奪されて手元になく、「支許…」は自分の書齋にあって、人目にはつかないのだという。つまり両本ともに米芾以外には実見した者のいない、実在を確認できない作品なのである。もとより記録した文献はない。⁸⁷⁾かくて米芾が故事人物画を描いたというのは虚構であろう。「自分で齋室に掛けた」というものの、原本、模本いずれも横巻なのであって、「掛ける」には不適である。「齋室に置く」ではなくて、入室者なら誰の目にも入るような壁上の軸だという処にも、米芾の計算があったと考えるのである。

それでは何のために、こんな見えすいた嘘をついたのかという疑問には、次のように答えられよう。上述の(三)、自作山水画の自慢話を売りこみ、(四)の注文に対する大きさの枠とその中味、そして、「李成関同の俗気なし」と再度の宣伝文句が続いている。つまり87条は自作の注文をとるためのブライスリストなのである。値段こそ書いてないが、「どうか買いに来てくれ」というのが、条全体の要約であり、彼

の本音なのである。「山陰図」はそのための前口上、実績の誇示にすぎない。

米芾がいつ、どのような状況で、こんな提言をしたのか、まだわかっていない。元豊五年の頃、彼は長沙掾という微官にあった。「かつて」と回想するいい方は、意外に李公麟「山陰図」から近い時期を、かえって意味するように思われる。窮迫していたのか、収集のための資金の調達が迫っていたのか、その時期の特定が今後の課題である。

(1) 謝安を除いた王、許、支三人の組み合わせによる画題もあって、「三高図」とよばれた。許詢のかわりに許邁、字は遠遊を入れている。

「題王許支図」、「題陸大夫画逸少遠遊道林」(宋晁説之「嵩山景迂先生集」五) 右の陸大夫は、次の陸仲仁に相違ない。

高郵陸仲仁画「王右軍支道林許遠遊三高図」、以献晁以道

(宋張表臣「珊瑚鉤詩話」二)

(2) 王献之、顧恺之二人が会稽の美しさを語っている。

王子敬云、従山陰道上行、山川自相映発、使人応接不暇

(「世説新語」言語)

顧長康従会稽還、人問山川之美、顧云、千巖競秀、万壑争流、草木蒙籠其上、若雲興霞蔚、(「同」)

(3) 米芾が骸から芾に改めたのは、この図の観記から十年後の元祐六年(一〇九一)であって、長沙当時芾と自書することはありえない。記録者の誤記であろうか。

(4) 李常(一〇二七—一〇九〇)、公拱はその字である。皇祐の進士、王安石と親しかったが、安石の新法には異を唱えた。哲宗時の戸部尚書、後出でて知鄧州(河南)、成都(四川)に移り、途次急死した。「画史」95ほか、「書史」にその名が見える。

(5) 同じ著者、周密の「志雅堂雜鈔」二、四(一二九二、一三〇一)にも見える。後者の款記は「米芾作」となっていて、「雲煙過眼録」の「米元

章作」と相連するほか、異同、誤記がある。

(6) 希文は、宣和三年の進士邵彪と思われる。

(7) 師正は、元豐元年同知枢密院事に累進した薛向であろう。

(8) 87条のこの箇所は難解である。鄧椿『画繼』には、この条を次のように書き直してあり、明張丑『真蹟日録』、清楊恩壽『眼福編初集』八、『宋米南宮山水屏跋』も『画繼』の文を採用している。古人の読解の苦心の一例として参考になる。異同のみ示す。

復作支許王謝於山水間縱步、…多以煙雲掩映樹木、不取工細、有求者、只作橫挂三尺、惟宜晉高中挂双幅成對、長不過三尺、標出乃不為椅所蔽、人行過、肩汗不著、…（『画繼』三）

(9) 『清河書画訪』申、米芾の項に『海岳遺事』を引き、中に米友仁の跋がある。

米公自写真、世有数本、一本服古衣冠、曾入紹興内府、有其子友仁審定贊跋云、先子昔手写晋唐間忠臣義士像数十本、張高壁、一時好古博雅移摹、流伝甚多

このほかには類似的の記録はない。「流伝甚だ多し」というのは誇張である。南宋内府で父親の書跡の鑑定に当たった米友仁は、時に高宗の意におもねって、真偽の判定を変えたといわれるが、右の跋文にも調子の良い、潤飾の傾向がある。裏付ける資料の乏しさが、それを示唆している。

朱浮墓

161 濟州破朱浮墓、有石壁、上刻車服人物、平生隨品所乘、日府君作令時、…又曰作京兆尹時

朱浮、字は叔元、沛国蕭（安徽）の人。初め後漢の光武帝に従って転戦し、偏將軍、幽州（河北京兆）の牧となって、北辺の警護に当たった。建武二年（二六）、舞陽侯（河南）となる。漁陽太守彭寵と隙あ

て、兵二万人の攻撃を受けて大敗するが、部下の反乱により彭寵が殺され、窮地を脱した。執金吾、父城侯（河南）となる。建武七年（三一）太僕卿、同二十年（四四）大司空、同二十五年（四九）新息侯（河南）。明帝の永平年間（五八―七五）、誣告に遭って天子の激怒を買ひ、死を賜った。（『後漢書』六三）

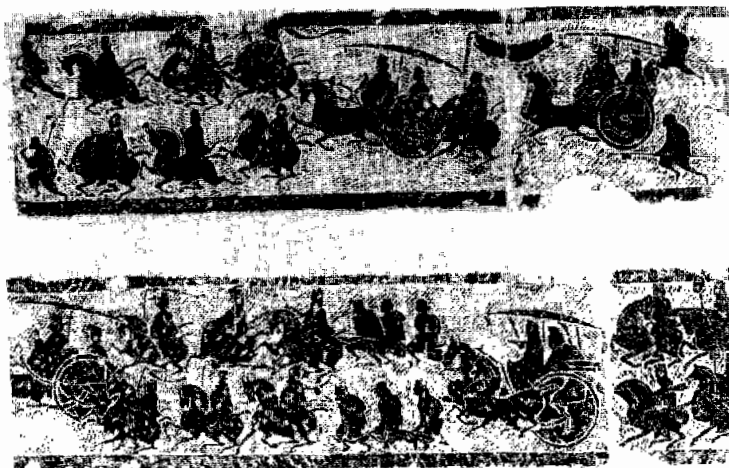
以上の朱浮の官歴は、画像右上の文字と必ずしも符合しないようにみえる。令は武帝の時に光祿勳と称呼を改めた郎中令の略であろうか。また京兆尹（警視総監）は幽州の牧をさすのであろうか。しかし、より高位の太僕卿、大司空など後年の官職の文字がないのは、石そのものが亡失したのであろうか。いずれも言及はない。

もともと車馬行列の刻石は、墓中に眠る主人公の生前の栄達の記録記念写真的な性格をもつ。車の形式や行列の規模が、当時実際に行われていたものにどの程度忠実であるかは別として、「この行列の墓に飾られた意図が、被葬者の光輝に満ちた、万人の願望的であった高い社会的地位を表現することであったのは疑いなくろう。」（図2）

しかし、刻石中の文字による官職の表示は、どの車馬行列にも付属しているものではない。「君為荊州刺史時」（李剛石室残画像）、「為九江太守時」（魯峻石室画像）、「此君車馬」、「君為都口時」、「為督郵時」（武梁氏石刻）などが主なものすぎない。²⁸⁾

そこで『画史』所載の文字と朱浮伝とが一致しないのは、墓そのものの主が、朱浮ではなくて、別人の墓、別人の車馬行列ではないかという疑いを抱かざるをえなくなる。濟州（山東鉅野県）という地名は、

朱浮の生地や死地始め無関係だし、その足跡が濟州に及んだことは彼の生涯に見出されないからである。



2. 漢 出行図
(四川 成都 羊子山一号墓出土)

鮮明隊

- (1) 林巳奈夫「後漢時代の車馬行列」『東方学報』37号、P 189 一九六六
- (2) 畢沅、阮元『山左金石志』第七、十一ノ二、一七九七

161 濟州破朱浮墓、有石壁上刻車服人物、…又曰京兆尹時、…蓋下坐、儀衛多、有曰鮮明隊、又某隊

鮮明の字義、明らかでない。「綺羅を飾った儀仗兵」の意であろうか。『後漢書』礼儀志に「列侯会耕祠、導從中鮮明卒」とある。また宋邵博『聞見後録』に、「王陽車馬極鮮明」の例がみえる。また魯峻の石刻には、「鮮明騎」の榜題がある。

行列は上下二段、中間は省略する。

祠南郊從大駕時 小史騎特幢

… … … … …

鈴下 鮮明騎

口口為騎 鮮明騎持弓(八騎)

校尉騎(中に歩卒四人) 鈴下(三十余騎)

鮮明騎(八騎)

宋洪适『隸統』第十七、魯峻石刻の項には、『画史』の朱浮墓、鮮

明隊の記事を引いて、

或いは先賢の姓字を細認するあたわず、ただ鮮明の数勝を見て、遂にこれを朱浮墓の壁画象というは非なり

と結んでいる。つまり魯峻の石刻に似たものを朱浮墓出土とした米芾の意見に対する批判も、南宋にはあったのである。

(1) 『隸統』第十七「魯峻石壁残画像」

此石上下三横、首行一勝云、祠南郊從大駕出時、次有大車、帳下騎、鮮明騎、小史騎凡十六、勝大車之上、一勝三字

張志和顔魯公樞青図

- 27 唐画張志和顔魯公樞青図、在朱長文、字伯原家、無名人画、甚佳¹¹

張志和、字は不同、婺州（浙江金華）の人。十六歳で明経（举士の科目）に合格し、唐肅宗（在位七五六―七六二）に敬重されて、翰林待詔を命じられたが、事に坐して貶された。後赦されて還ったが、親の喪に遭って辞去してからは、再び出仕しなかった。江湖に居て釣糸を垂れ、自ら煙波釣徒と称し、「太虚（宇宙）を室とし、明月を燭とす」と称して、何物にも拘束されぬ、悠悠自適の生涯を送った。高適

な隠者の理想像として敬慕された。李徳裕は列伝の末尾に、「隠れて名あり、顕れて事なく、窮せず達せず」と賞揚している。

顔真卿「浪跡先生玄真子張志和碑」（『顔魯公文集』九）が、伝記の根本資料で、『新唐書』一九六、「唐才子伝」三、「歴代名画記」十の張志和伝は、ほとんどこれによっている。

顔魯公は、顔真卿（景竜3―貞元1、七〇九―七八五）、字は清臣のこと。広徳二年、魯郡開国公に封ぜられたことから、顔魯公とよばれる。本貫は瑯琊臨沂（山東）だが、生まれは長安である。「顔氏家訓」の著者、隋顔之推は五代の祖、唐太宗の中書郎、五経の文字を校定した顔師古は曾祖伯父、ほかにも歴代学者や能書家を輩出した学究の家の出である。河南陳郡の殷氏と代代姻戚関係があり、真卿は父母双方の家系から能書家の血をつぎ、その人柄を反映した、強烈、嚴肅な書蹟が多く伝わっている。

開元二十二年（七三四）、二十六歳で進士、監察御史にのぼり、内外諸官を歴任したが、剛直の性格から楊国忠に憎まれて、平原太守におとされた。天宝十四載（七五五）安祿山の乱に抗して平原（山東）で義兵を挙げ、一代の名臣として名を馳せた。正義感が強く、忠勤を貫き、しばしば権力者と衝突して、貶流と登用を繰返し、肅宗の時、憲部尚書に補せられ、御史大夫を加えられたが、再び当路者に憎まれて、徳宗の建中二年（七八二）、李希烈の乱を慰諭するよう、特使に派遣され、貞元元年（七八五）八月、陣中で縊殺された。

〔旧唐書〕一一八、〔新唐書〕一五三

張志和との交誼は、大曆七年（七七二）九月から十二年（七七七）八月まで、湖州（浙江吳興）刺史に貶されていた顔真卿が、志和の高節を知り、漁歌五首を贈ったことから始まるという。

（唐朱景玄『唐朝名畫録』）

肅宗から賜った奴婢各一人を、張志和は漁童、樵青と命名して夫婦とした。大曆七年頃、張志和は湖州にいた顔真卿の処へ、食客として招かれたことがある。

（『新唐書』一九六）

『画史』の唐無名氏の画は、その縁で顔真卿、張志和、樵青三人が会したのにちなんで、おそらく三人の並列する立像を描いたものともわれる。⁸²⁾

(1) 朱長文、字は伯原（宝元？元符1、一〇三九—一〇九八）、蘇州呉郡の人、仁宗嘉祐四年進士に挙げられたが、足疾のため仕えず、郷里の雍熙寺の西、菜圃坊に幽勝の園池を築き、古道に潛心した。菜圃先生とよばれ、元符三年（一一〇〇）、米芾は「朱菜圃先生墓表」を書いてゐる。声望士林に振い、郡守監吏で政務を問わんとして造請せざるなく、士大夫の呉を過ぎる者は皆奔走して遅れるを恥とし、名京師を動かすに至ったという。「元豊の間、江淮の士人で疾をもつて仕えざるも、行義の郷里に聞えたものは二人、楚州の驛者徐積と、跛者の朱長文」といわれる。

（宋龔明之『中興紀聞』二）

元祐初年本州教授、八年太学博士。程俱「北山小集」八に「送朱伯原博士赴太学」詩（癸酉の注記がある）を収める。秘書省正字に遷り、樞密院編修官となり、元符元年二月、六十歳で卒した。（『宋史』四四四）『画史』にも現われる林子中と最も善く、著述は甚だ多い。中でも『呉郡凶経統記』（元豊七年序）、『墨池編』（熙寧七年八月六日序）が名高い。墓は元符元年六月、江蘇呉県の支硎山の南に建てられ、二年後の元符三

年、米芾の「朱菜圃先生墓表」が書かれた。真蹟は失われたが、清呉其貞『書画記』六に記録がある。全文四一三字、款署は「菜圃先生之墓 江淮荆浙等路制置使事米元章表」の二十字。諸文獻については、中田勇次郎「米芾」P196（二玄社、一九八二）に詳しい。

米芾と朱長文の交遊は、『書史』72、「朱長文収錦織成諸仏、…題晋永和年造…」、「宝晋英光集」補遺、「閩門舟中戲作呈伯原」詩などがある。

(2) 画を三人の立像と推測するのは、たとえば大徳寺真珠庵蔵の龐蘊居士、その妻、娘の靈照女を描いた「三龐図」などを参考にしたからである。

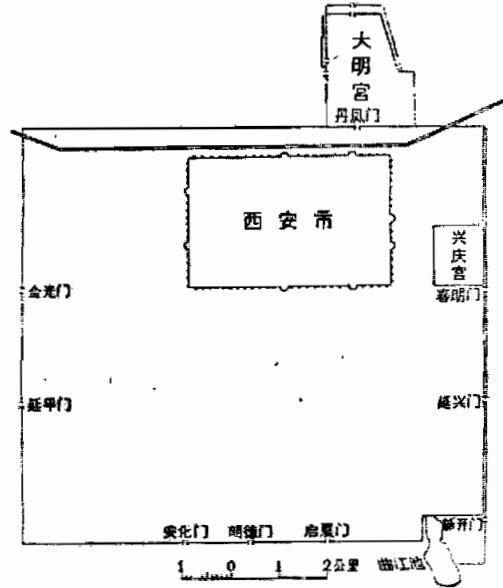
明皇幸興慶図

86 古人図画無非勸戒、今人撰「明皇幸興慶図」、無非奢麗

明皇は唐玄宗の諡号、至道大聖大明孝皇帝を略したよび名。興慶宮は、西安市の東南にある唐長安城興慶坊の旧址。（図3）開元二年（七一四）七月二十九日、玄宗は興慶里にあった藩王時代の旧邸を離宮とした。⁸³⁾開元十六年（七一八）正月三日、護衛兵を興慶宮に移し、政務を執ることとした。この推移は清朝乾隆帝が紫禁城の外朝、保和殿から内廷の乾清宮に後退して執務したのと似ている。

城址は南北一二五〇メートル、東西一〇八〇メートルの長方形で、北宋呂大防「興慶宮図」、西安碑林蔵「宋刻興慶宮図碑」が往時をしのべている。⁸⁴⁾

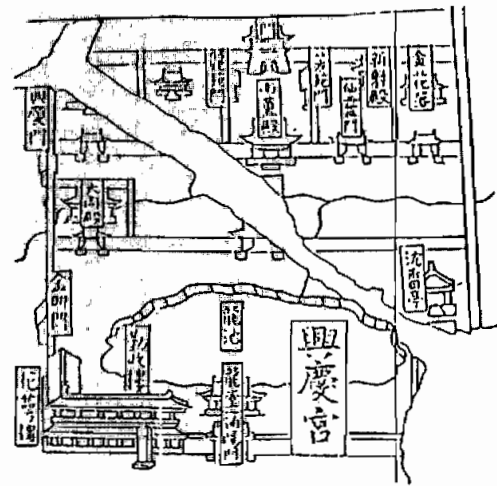
正倉院宝物を記載する東大寺献物帳（七五六）に載せる、「大唐勤政楼前観葉図」六扇にいう、勤政務本楼は、興慶宮の西南にあつて、



3. 興慶宮位置 (1959年 10期『考古』)

中心の正殿をなした殿閣である。(図4) 『画史』の「明皇幸興慶図」も、この勤政楼前での最も華やかな光景の一つを描いたものに相違ない。宴会や奏楽、科擧の実施、軍隊の出陣の激励と送行、これも紫禁城と変らない。『旧唐書』からその行事の一部を抜いて、次に示す。

- 開元二十八年、春正月壬寅、以望日御勤政楼、講群臣、連夜燒燈
- 天宝四載、春三月甲申、宴群臣于勤政楼
- 天宝十三載、三月壬戌、御勤政楼大酺（酒宴）、北庭都護程千里、生擒阿不思献于楼下
- 天宝十三載、秋、上御勤政楼、試四科制举人
- 天宝十四載、春三月丙寅、宴群臣于勤政楼、奏九部乐



4. 宋呂大防『長安城図』興慶宮西南角部分

天宝十四載、安祿山反、高仙芝等進軍、上御勤政楼、送之
勤政楼下での綺羅を尽くした舞楽の盛儀のさまは、まさに絵巻のようである。錦衣の宮人数百人、犀や象まで登場したという。
〔旧唐書〕九 玄宗本紀下

玄宗又嘗以馬百匹、盛飾分左右、…樂工少年姿秀者十数人、衣黄衫、文玉帶、立左右、每千秋節、舞勤政楼下、後賜宴設酺、亦会勤政楼、…内閑既使引戲馬、五坊使引象、犀、入場拜舞、宮人数百衣錦綉衣、出帷中、擊靈鼓、奏小破陣樂、歲以為常

〔新唐書〕「礼楽制」

この華麗な状景を、米芾は「今人が撰」(創案)したという。おそら

く唐画の翻案だろうが、北宋の復古主義（リバイバル）は、このような画題にも及んでいたことの傍証である。

(1) 『唐会要』三〇、『大唐六典』七

(2) 一九五八年一月から十二月にかけて、発掘調査が行われた。

「長安城地基初步探測」『考古学報』一九五八年 第三期、陝西省文物管理委員会

馬得志「唐長安興慶宮発掘記」『考古』一九五九年 第十期

秦建明「唐興慶宮勤政務本楼位置考」『考古』一九九四年 第二期

馬得志「再論唐興慶宮勤政務本楼的位置」——兼与秦建明同志商榷——

『考古』一九九四年 第六期

Seehyang P. Chung: "Hsing-ch'ing Kung: Some New Findings on the Plan of Emperor Hsuan-tsung's Private Palace", *Archives of Asian Art*, XLIV/1991

麟鳳図

163 又有麟鳳図、半篆半隸、…云惟永建元年秋十月、饗時山陽太守

河内孫君、見碑不合礼、掾重造記

この碑については、米芾所見に近い時期と清朝の三つの記録がある。

それらの記述は時に『画史』の詳細に及ばない。ただし『画史』との字句の異同を見ると、『画史』の分は誤訛とみなさざるをえない。¹¹¹⁾

宋趙明誠『金石録』十四「漢麟鳳贊并記」

右漢麟鳳贊、其上刻麟鳳像、各為贊附于下、又別有記云、永建元年秋七月、山陽太守河内孫君新刻瑞像麟鳳、最後有銘、銘凡五句、句九字、按漢史、安帝時頻有鳳麒麟之瑞、而順帝永建中則無之、不知孫君刻此碑、何謂也

宋洪适『隸釈』十六「麟鳳鳳凰碑」

又有山陽麟鳳碑二物、其一石、其像小於此碑、像下有贊云、天有

奇鳥、名曰鳳凰、時下有德、民富國昌、黃龍嘉禾、皆不隱藏、漢

德巍巍、分布宣揚、又云、天有奇獸、名曰麒麟、時下有德、安國

富民、忠臣竭節、義以修身、闕愆采善、明明我君、碑陰有記云、

永建元年山陽太守河内孫君新刻瑞像、最後有銘辭、皆篆文也、胡

承公云、其石兩旁有隸書六十九字、趙氏但得其篆、予所藏亦然

清葉奕包『金石録補』四「漢麒麟鳳凰碑」

右碑凡二石、其像高二尺余、刻麒麟鳳凰、較多刻、二瑞甚奇、各

以二字題其上、字頗大而古、非永建元年山陽太守所刻之碑也、

これらの資料を総合すると、碑の大体は次のようになる。碑は漢安帝

(在位一〇七—一二四)の時に現われた瑞獸の奇跡を、次の順帝の永

建元年(一二六)に建てたもの。高さは二尺、一石(『金石録補』の

二石は誤まり)、上に二つの動物が刻され、麒麟、鳳凰の各二大字が

ある。『金石録補』が「甚だ奇」というその画は、「麒麟の一角の長さ

は足ほどもあり、悪馬のように跳ねている。鳳凰は冠高尾長、甚だ怪

しむべし」と『画史』が伝える。「永建元年…」の文字は、碑側にあ

り、「礼にかなわざるを見て重造云云」の文字は、原刻になく、米芾

が勝手に補ったものと知られる。また「漢威徳…辛酉（安帝建光）、
 一一一）之節」以下の銘辞は、『画史』のみが記録する。また文字の
 古様についても、『画史』の題詩に「非篆非科璞已雕」というように
 書家米芾だけが示した関心事であった。『画史』は雑駁な書物と見な
 されがちだが、時に最古の、そして他にない資料を載せている。

- (1) この条の異同は、『山林拾遺集』にわずかにみえる。その異同は微細な
 もので、(2)以下の文字の異同とは相違している。
- (2) 趙明誠の原註に、「七は十にも見える、石本残欠のためよくわからぬも
 の、秋に十月はないから七だろう」という。
- (3) 分布、『画史』に永布に作る。
- (4) 闕、『画史』に聞に作る。
- (5) 采、『画史』に采に作る。

Translation of Mi Fu's *Hua-shi* (part I) (summary)

Hironobu KOHARA

This is an attempt of the complete translation of Mi Fu's *Hua-shi*, which was
 appeared in 11th century and one of the most important materials for the research of C
 hinese painting. However, the translation which we can trust to understand the text,
 has not been appeared yet. The writer is trying to translate the *Hua-shi* and here its
 part is printed.